

第6回 IEHE教育開発セミナー

「言語学研究から外国語教育へ」

日時：2017年 7月 6日（木） 16:30～17:50

会場：教育・学生総合支援センター東棟 4階大会議室

発表者の日頃の言語学研究の成果を、英語、フランス語、日本語等の外国語教育の改善にどのように応用できるかについて考察します。



報告/言語・文化教育センター

▶ 発表1 「日本語統語・意味情報付きコーパスとその日本語学習への応用」

言語・文化教育センター教授 吉本 啓

国立国語研究所共同研究プロジェクトとして平成 28 年度より、現代日本語のテキストに対し文の統語解析情報（句構造）および論理意味表示（述語論理式）をタグ付けしたコーパス NPCMJ を開発し、一部インターネットでの公開を開始している。本コーパスの特徴は、統語解析情報から自動生成される論理意味表示を利用することで、コーパス中の各文の語句の間の文法的関係（依存関係）を洩れなくリンク付けすることができることにある。また、日本語テキストに頻出する主語や目的語の省略も、ゼロ代名詞という明示的な形でタグ付けする。これらのことから、ゼロ代名詞、主節 - 従属節間の主語・目的語のコントロール、さらに関係節や主題化等の非境界依存構文 (unbounded dependency) においても、各動詞・形容詞（用言）と直接関係づけられる格名詞句が何であるかについて正確な情報を抽出することができる。本発表では NPCMJ のアノテーションと検索利用法についてイントロダクションを行い、さらにその外国語としての日本語の教育および学習への応用について検討する。

▶ 発表2 「中間言語のリズムの分析について」

言語・文化教育センター講師 Bertrand Sauzedde

すべての言語は音声リズムを持っている。普段言語の音声リズムは二つの種類に大別することができると言われていた。英語のようにストレスリズムを持つ言語は「強勢拍リズム」に分類され、一方でシラブルリズムを持つ言語は「音節拍リズム」に分類される。第二言語の学習者は目標言語を習得する時、中間言語の過程を通る。この中間言語は当然目標言語と母国語に影響を受ける。音声学の視点から見ると中間言語とともに第二言語は中間音韻論のプロセスを通じて進化する。この発表では学習者の中間言語のリズムをどのように分析することが可能であるかについて考察する。

▶ 発表3 「認知言語学の英語教育への適応—事象合成から句動詞の教育へ—」

言語・文化教育センター講師 Ryan Spring

Talmy (1985, 1991, 2000) の提案した事象合成における言語類型化の仮説は、認知言語学的な観点から広く研究されている。また、この言語類型化の仮説は第二言語習得という分野に適用する研究 (Cadierno, 2004, 2008; スプリング 2015 など) が進み、母語と異なる言語タイプを習得する際、どのような困難が生じるかは明らかになった。例えば、Inagaki (2001), Spring & Horie (2013) などによれば、日本語母語話者が英語を習得する際、移動の経路を動詞以外のところに表す表現が非常に習得し難い。また、スプリング (2015) は、日本人英語学習者が英語の状態変化表現において、移動表現と類似するような困難が起こることを指摘した。上記の成果に基づいて、Spring (in Press) は移動表現・状態変化表現と句動詞の強い関連性を指摘し、Talmy が提案した事象合成理論を用いて英語の句動詞を日本語学習者に教える方法を提案し、その指導法の効果を教育実験で実証した。本発表は Talmy が提案した事象合成における言語類型化の仮説、それを第二言語習得に適応した研究、およびこれらの先行研究に基づいた英語教育へ適応した研究を紹介する。